食戟のソーマ　薙切えりな　陵辱

akirambo

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

薙切えりなが陵辱されるお話。

目　次

食戟のソーマ　薙切えりな　陵辱　1

食戟のソーマ　薙切えりな　陵辱

薙切えりなは重い瞼をゆっくりと開けて、天井の照明の眩しさに思わず顔を背けた。ぼやける視界を瞬きしてハッキリさせ、自分が寝ていたベッドから上半身を起こすと、まったく知らない部屋に困惑する。

「ここは……」

どこかのホテルの一室なのだろう。白い壁には額縁に囲まれた絵が飾られていて、テーブル、ソファ、テレビ、冷蔵庫などが置かれており、大きな窓から外を見ると、都会の夜景が目に入る。

「綺麗……」

夜景に見惚れて呟くと、同時にガチャリとドアが勢いよく開く音が聴こえた。振り返ると5人の男達が雪崩れ込んできて、あっという間にえりなを取り囲んだ。全員、顔の上半分に蝶の形をしたパーティーマスクをしており、パンツ一丁で体つきも痩せている者や太っている者、背の？い者に背の低い者と様々だった。

「何よ、あなた達は？ここは何処なの」

異様な雰囲気に少し気圧されながらも男達に問いただすが、直感で自分の身に危険が

降りかかることを悟った。

「ここはラブホテルの一室だよ。俺たちの同志の一人が経営しているんだ、そう、あんたへの復讐するもくろむ同志さ」

真正面に立っている少し筋肉質の男が腕を組みながら言った。

「復讐ですって!?そんなことをされるようないわれはありません」

キッパリと言い放ったえりなの左頬に筋肉質の男の平手打ちが飛ぶ。

パチィン!

「何するのよ!私を誰だと思って……」

「ああ、知っているよ、あんたの下した評価のせいで失職した奴、店が潰れた奴、家族に逃げられた奴が集まっているんだ。知らない訳がないだろ」

頬を抑えて涙目で睨みつられても、筋肉質の男は少しもこたえる風もなく吐き捨てるようにして言った。マスクの下の顔を怒りで少し歪ませながら懐のポケットからスマートフォンを取り出して屈み込むと、えりなに画面を見せた。

「……緋紗子!アリス!」

画面に映っていたのは、裸に?かれて天井から伸びた鎖で両手を拘束されている新戸緋紗子と薙切アリスの姿だった。

「可哀想になぁ…あんたのせいでこの二人は巻き添えを喰らったようなもんだから

なぁ……」

ワザとらしく悲しそうな声で、心底同情しているように話しながら、スマートフォンの画面をタップさせて違う画面に切り替えると、緋紗子とアリスが他の男達に陵辱されている様子が映った。緋紗子は膝立ちで口と両手で男たちの肉槍に奉仕させられており、苦し気に顔をすぼめている。アリスの方は拘束されたままバレリーナのように右脚を持ち上げられ、男の一人が股間の辺りに顔を埋めていた。

「二人はどこにいるの?こんなことは止めさせなさい!」

えりなは筋肉質の男に詰め寄ろうとするも、逆に顎を掴まれてグイと引き寄せられる。再びスマートフォンの画面を見せつけられると、さらに悲惨な光景にえりなは目を見開いた。緋紗子、アリス共に四つん這いの体勢で男達の肉槍に貫かれていた。尻を高く上げて顔を床の紺色のカーペットに突っ伏させながら、苦痛と恥辱に顔を歪ませている二人が映っている画面を閉じると、筋肉質の男は噛んで含めるように言った。

「二人はここの何処かの部屋にいるよ。でもあんたの態度しだいではさっきよりもさらに酷い目に会うかも知れない。彼女達を助けて欲しいなら方法は一つしかない…これさ」

筋肉質の男は立ち上がり、パンツを脱ぎ捨てるとえりなの顔面に暗褐色のだらんとしたモノを突き付けた。言わんとすることをえりなは理解し、絶句した。しかし、震える

右手で恐る恐る肉の異物を触ろうとする。自分一人だけではなく、自分の大切な秘書や従姉妹を救う為なのだ、と言い聞かせて男のモノをそっと握った。予想していたよりも柔らかい感触と妙な生暖かさに少し物怖じつつ、ゆっくりと上下に右手を動かし始めた。

シュッ　シュッ　シュッ

擦り始めると、だらんとしていたモノが硬さを帯び始め、濃くて不快な臭いが鼻をついてきた。眉をひそめて何も言わずに手を動かし続けると、粘着質な音が混じってくる。

クチッ　クチュッ　クチュッ

だらんとしていたモノは、えりなの手の中で緋紗子やアリスを犯していた肉の槍へと変貌していた。芋虫の頭のような亀頭の先から透明な液体が漏れだし、それが粘着質な音の正体らしい。今まで見たことのない人体の変貌に嫌悪と驚嘆が混ざった感情で肉槍を見ていると、筋肉質の男がいきなりえりなの頭に優しく手を置いて言った。

「そろそろそのカワイイお口でご奉仕してもらおうかな…咥えるんだ」

血管が青筋をたてている肉槍を言われた通りに口に含んだ。今までに嗅いだことのないような生臭い臭気が、口腔内から鼻孔へと流れ込んできて息苦しさと共にえづきを誘う。

「おうっ、うおぇ」
「ハハハッどうだ?神の舌で味わうち〇ぽの味は」
笑いながら見下ろす筋肉質の男の言葉をなるべく耳に入れないようにしながら、妙に生暖かい肉槍に舌を這わせていく。
「よし、動かすぞ」
宣言すると、筋肉質の男は間髪入れずにえりなの後頭部を掴んで前後に動かし始めた。いきなり咽奥に突き込まれて汚い音が出てしまう。
「んごぅえぇっ」
ジュブッ　ジュブッ　ジュブッ
口の中に溢れてくる唾液が、水音をたてて唇の端から垂れて顎を伝い落ちていく。苦しさに鼻で呼吸をしなければならず、えりなは涙目になりながら暴虐の時間が過ぎるのを待った。
「よーしお前ら、神の舌の上に出す記念すべき一発目だ。括目しろよ」
筋肉質の男は他の四人を見回しながら高らかに宣言し、男達もそれに対して声援を送り始める。
「いいぞ!やっちまえ」
「高慢ちきな女に味あわせてやれ」

それぞれ口々に高揚した気分で叫びながら拳を突き上げる。筋肉質の男は息を吸って止め、えりなの口の中に噴射した。

ぴゅるるるるるるるるっ

口腔内に熱く粘っこい白い欲望の奔流を受けたえりなは、必死に顔を引き離そうとする。しかし、後頭部を逞しい両手でガッチリと押さえつけられているために嫌でも精液を飲み込んでしまい、その生臭さと苦みの中に感じる妙なまろやかさを直で味わうハメになった。

ごくっ　ごくっ

喉を鳴らして飲み込むえりなを男達は満足そうに眺める。

「えほっ　げほっ　おげえっ」

噎せ返りながら肉槍を口から放すと、尿道から流れ出た精液の残りが跳ねて制服の上着に付く。口元を押さえて咳き込み続けていると、筋肉質の男が他の男達に手を振って合図した。すると一人が何処からともなくビデオカメラを取り出して撮影を始め、他の三人はベッドの上ででえりなを押さえつける。

「いやっ　やめてッ　何をする気なの」

抵抗するも大の男三人の腕力にかなう筈もなく、あっさりと組み伏せられてしまう。上着を引き裂かれてボタンが飛び、ワイシャツやスカートも布の裂ける音と共に床に散

らばっていく。ピンクのショーツとブラジャーのみのあられもない姿にされたえりなは、涙目でビデオカメラで撮影している男を睨み据える。

「こんなことをしてタダで済むと思わないことね。貴方達はもうおしまいよ」

睨むえりなに対し、ビデオカメラの男は鼻で笑ってスルーした。代わりに筋肉質の男が同じく馬鹿にしたようにワザとらしくわめきたてた。

「あぁ、ごめんなさい、許してくださいえりな様…なんていうと思ったか?おい、お前らやっちまいな」

途中でふざけるのをやめて、固い声で逆にマスクの奥から睨みつけると、えりなは蛇に睨まれた蛙のように動けなくなる。その隙をついて、羽交い絞めにしている三人の中で一番腹の出た男がえりなのブラジャーを引き千切った。ぷちっという音と共に取り去られ、包まれていた白い桃のようなプルンと胸が零れ落ちる。

「へぇ、まだ15か16歳なのに大きなオッパイしてんじゃねーか」

ニヤリと歯を?き出して笑みを浮かべると、腹の出た男は後ろからえりなの右の乳房を揉みだした。ふにゅっと掌の中で形を変えた柔らかなふくらみの感触を楽しみながら、えりなに尋ねる。

「へへへ、どうだい?オッパイを揉みくちゃにされる気分はよ」

「ふっ不愉快よっ!」

振り返ることもせずにえりなが吐き捨てた。すると、右脚を押さえていた男が左の乳房に、左脚を押さえていた男が正面にまわってパンティー越しの股間に吸い付き始めた。

「ふぁっ?やっんっ何を…」

えりなが驚いて声を挙げると、乳房に吸い付いた男がチェリーのような乳首を舌で転がし、弄ぶ。乳輪の周りを唾液をたっぷりまぶして赤ん坊のように吸うと更に声のトーンが一つ高くなり、身をよじらせる。股間に顔を埋めている男は舌でえりなの秘所を刺激しており、荒い息を吐いていた。

腹の出た男も負けじと右の乳房をさらに乱暴に揉みしだく。下からすくい上げるようにしたり、掌で押し潰すようにしてみたりするとえりなの息が荒くなっていく。その頃合いを見計らったかのように、股間に吸い付いていた男が口を離して、パンティーの両端に両手のひとさし指を引っ掛けスルスルと脱がしていった。

「あっ!?」

えりなが拒否の声を挙げる間もなく、パンティーがあっさりと取り去られてしまった。金色の恥毛が程よい濃さに生えており、その奥にほんの少しだけ開きかけた割れ目が見える。

「おおぅ、スゲェ…あの薙切えりなの生マ〇コだぜ。綺麗なもんだな」

パンティーを取り去った男が感嘆の声を挙げて言った。胸に吸い付いていた男も乳房から口を離して、食い入るように秘裂を見つめており、他の男達もその箇所に視線が釘付けになっていた。

「よーし、御開帳の時間だぜ。」

筋肉質の男がニヤニヤ笑いを浮かべながら、他の男達にどくように手で指示すると、えりなをベッドの上に突き飛ばした。立ち上がる間もなく、両脚の足首をガッシリと掴まれ、左右にガバッと大きく開かれてしまう。

「いやっ！」

「ようし、たっぷりと濡らしておこうな」

「えっ？」

思わず間抜けな声で返事したえりなに構わず、屈み込んで開きかけの性器に唾液を乗せた舌を這わせた。突然のことにビクッと身を引きつらせて声を挙げる。しかしその声は戸惑いと嫌悪だけではなく、性器に触れられた際に感じる僅かな性的な喜びを含んでいた。その反応に満足な顔でさらに舌での刺激を続けると、腰をピクッピクッと浮かせて色めいた喘ぎを発し始める。

ジュル、ジュルル

「あっ、んうっ」

いやらしい割れ目が、唾液とえりなから溢れ出てきたものが混ざりあって卑猥な水音をたてる。えりなは目を閉じ、美しい顔を悔し気に歪めていやいやをするように首を振った。筋肉質の男の舌技は執拗なもので、性器の隅々まで舌先で丹念にほぐしていき、ピタリと閉じていた膣をこじ開けるようにしてほじる。さらに小さな秘核をいたぶるように突くと、えりなの腰がまたピクリと揺れた。

「ああっ!?」

白くて細い咽を反らせて鳴くのを聞いた男達は、息を飲んでその様子を見守っている。全員、パンツの前を自らの肉槍で膨張させて、この可憐な美少女がどこまで耐えることができるのか興味津々なのだ。

少し小さめの真珠のような秘核をチュウッと勢いよく吸い出すと、腰が今までにない位にビクンッと跳ねる。数秒間のか細い悲鳴と共に、全身をガクガクと痙攣させて、えりなは糸の切れた操り人形のように力尽きた。

「ハァ、ハァ、んぅっ…ハァ」

体中に汗を浮かべ、顔と身体を横に背けたえりなの様子は男達の被虐心に油を注ぎ、燃えあがらせるには充分すぎるものであった。

汗で金髪が張り付いた顔は目を虚ろにして、頬はやや紅潮している。豊かな双丘は、ぐったりと投げ出された両腕の二の腕部分によって押し潰されてさらに谷間が強調

されていた。腰の括れから尻のなだらかなラインは撫で回したくなるほど美しく、長く綺麗な脚の大腿には程よくむっちりとした肉が付いていた。

「そろそろ本番と行こうか」

筋肉質の男がベッドに上がりえりなに手を伸ばしてくる。何とか逃れようとするものの、手足に力が思うように入らずにあっさりと捕まり、四つん這いの体勢へと組み伏せられた。えりなの背後に膝立ちとなって安産型の尻を眺め、溜息をつく。

「どこから見ても非の打ち所がない身体だな…お前ら、よぉく見とけよ?·えりなお嬢様の初めての様子をな」

「この瞬間を待ってたんだ!」

「次はおれに回してくれよ?」

「大人の階段登らせてやれ!」

筋肉質の男は急かす男達に焦るなと言わんばかりに手を振って、ビデオカメラを構えている男に言った。

「キチンと撮ってくれよ?·信頼してるぜ」

「あぁ、任せとけ」

ビデオカメラの男は親指を立てて笑った。

「何を…するの…?」

えりなは肩越しに尋ねたが、その声は少し震えていた。自分でも何となく分かっていた。今までよりも、さらに屈辱的な目に遭うのだと。

筋肉質の男は鼻で笑いながらえりなの腰を両手でガッシリと掴んだ。下半身の肉槍は一度射精してだらりとしていたが、またその醜悪な強靭さを取り戻して天を仰がんとしている。

「そんな、ウソよ…やめて、それだけは」

自分がこれからされることに気がついたえりなは目を見開き、絶望した。犯される、緋紗子とアリスがされていたように、野蛮で、愛のない、ただ欲望のままのケダモノ共に、その身を陵辱される。筋肉質の男はその様子を楽しむかのように、自らの剛直とかした肉槍を秘所へと近づけていく。その亀頭部分が膣の入り口にゆっくりと埋まっていくとえりなの眉間に皺が寄り、痛みに流れた涙が柔らかいシーツに零れ落ちていく。

「いた…い」

えりなが苦痛の呻きを挙げるのにも構わずに、腰を進める男も少し荒い息を吐いた。

「凄いぞ、この食いつき、きつい、ぞ」

肉槍の半分以上がえりなの膣に埋まっていて、結合した箇所から一筋の赤い筋がスッと垂れ落ちてシーツに小さな染みを作る。それを見た男達がワッと囃し立てる。

「えりなちゃんバージン卒業、おめでとう!」

「自分が見下した男に初めて奪われるってどんな気持ち？」
「おぉふ」と筋肉質の男は息を吐いて結合部を見下ろす。
「まずいな…食い千切られそうだ…動くと持たないかもしれん、速めにケリをつけるかな」
気合と共に、残りを膣の中に一気に突き込むと、痛みにのけ反ったえりなには構うことなく肉槍を抜いては入れるのピストン運動をはじめる。
クチュッ　クチュッ　クチュッ
二人の結合部から濡れた音がもれだし、えりなも膣と秘核が逸物に擦れてもたらされる快感に徐々に艶のある声をあげていく。後ろからガツガツと激しく突かれて、二つの乳房がプルプルと激しく揺れ、大きな尻も目の前で打ち付ける度に柔らかな尻肉に波が広がるようになっていた。
パンッ　パンッ　パンッ
「あっ、あっ、やっあっ、い…くっ」
男が抜き差しを繰り返す度に男の腰と、えりなの尻がぶつかりあって肉と肉の打ちあう音が響く。えりなは閉じた瞼の端から涙を一筋流し、シーツを両手でギュッと握りしめて喘いだ。
筋肉質の男も、えりなに挿入してから一分も経たないうちに限界を迎えようとして

いた。もっと責め立てていたかったが、予想以上にしまりがきつく、動く度に亀頭部分に吸い付いて、射精しないようにコントロールしなければいけなかったが、もはやそれも無理なようだった。

「ようし、中出し一発目だ！濃いのタップリと出すからな」

叫ぶや否や、ラストスパートよろしく打ち付ける速度が速くなった。　えりなはただされるがままに全身を揺すられ、その時が来るのを待つしかなかった。

パンパンパンパンパンパンパンパン

「やめてッ！あっやぁっ、中はっ…だめぇ！」

えりなが叫ぶと同時に、射精が始まった。

びゅるるるるるるるッ

肉槍の先端から噴出した精液が膣内に勢いよく叩き付けられ、子宮の中に落ちていく。えりなの口内に射精したときよりもさらに多くの白濁の欲望を吐き出し続けながら、筋肉質の男は快感の余韻に浸って目を閉じた。

「あっ…あっ…」

シーツに顔を埋めて、尻を高く掲げた状態でうわ言のように言葉にならない声を挙げ続けているえりなの秘所から肉槍を引き抜く。白濁と、破瓜の際に流れた血が混ざりあって膣口からゴポリと垂れ落ちていった。

「ようし、お前ら、あとはよろしくやっていいぞ」

待ちくたびれたようにパンツを脱ぎだす男達の逸物はそそり立っていた。ビデオカメラの男もテーブルの上にカメラを置くと、男達と共にえりなへと近づいていく。

「まだまだ相手をしてもらうぜ、タップリとやらせてもらうからな」

耳に入ってくる男達の言葉に、えりなは朦朧とした意識の中で思った。まだまだこの陵辱は終わりそうもないのだ、と。

そのあと、えりなは緋紗子とアリスを含めた三人で、さらなる辱めを受けることになった。さらに多くの男達に徹底的に慰み者にされ、その様子を写真や動画に収められた。

えりな達三人が跪いて一本の肉槍に舌での奉仕を加え、他の男達は野次や歓声を飛ばしながらそれを見物している。限界に達したのか、先から精子がほとばしり三人の顔や髪の毛に降りかかっていった。トリプルフェラが終わると、他の男達は三つのグループに分かれてえりな、緋紗子、アリスにそれぞれ襲いかかって行った。

えりなは天井から伸びている鎖で両手を拘束されたまま犯された。右脚を抱え上げられた状態で、太くて硬い肉槍をうちこまれており、脇や尻を含めた全身を残りの男達の舌や手で愛撫されていた。

緋紗子は四つん這いにさせられ、秘所と肛門を小さな球体を連ねたような淫具で嬲

られていた。粘着質な音をたてながら体液に濡れた淫具が独特の輝きを放つ。
　アリスは男の上に跨って、ショートヘアを汗で張り付かせながら淫らに腰をふっており、はしたない声を挙げ続けている。
　三人の美少女に、男達は肉食動物のように群がっていった。結局三人とも行方不明となり、遠月学園では、他にも女子生徒が数人姿を消すという事件が相次いだという。